

室内環境学会理事長あいさつ ～スマート・ソサエティとして～



東海大学 関根嘉香
(聞き手：出版委員長)

一理事長として2期目を迎えるにあたり、今の心境をお聞かせください。

関根 2016年12月にタスキを渡され、あっという間の1期2年間でした。この度、理事長として2期目を務めさせて頂くことになり、重責に一層身が引き締まる思いです。

本学会は1994年に室内環境研究会としてスタートし、1998年に室内環境学会、2013年に一般社団法人室内環境学会となり、体制的にも財政的にもより逞しい組織になってきました。これまでの2年間、皆様のご協力のもと、「会員サービスの拡充」、「グローバル化への対応」そして「プレゼンスの向上」を基本方針に学会運営に努めてまいりました。幸いにも会員数は500名規模で微増。学会活動の根幹をなす分科会は、2年前は微生物分科会、燃焼器具分科会、化学物質分科会、微粒子分科会の4分科会でしたが、現在は災害時室内環境分科会および環境過敏症分科会が加わり6分科会になりました。また、ここ数年の学術大会の充実ぶりは目を見張るものがあり、平成29年佐賀大会（市場正良大会長）、平成30年東京・大岡山大会（鍵直樹大会長）はいずれも大盛況でした。

引き続きこの3つの方針のもと、学会発展に微力ながら寄与していきたいと思っております。

—3つの方針について具体的にお聞かせください。

まず「会員サービスの拡充」について。

関根 会員サービスの拡充には二つの意味があり、一つはすでにあるのに利用されていない機能を使いやすくすること、もう一つは新たな機能を搭載することです。すでにご存知のように、2018年から本会機関誌「室内環境」は、これまでの年2回から年3回の発行となりました。出版委員会の皆様のご尽力により、会員からの投稿論文に加えて、特集テーマに沿った総説や解説論文も掲載されるようになり、誌

面は質・量ともに大変充実したものになりました。学会誌は読み手だけでなく、書き手にとっても満足度の高いものでなければなりません。今後は、電子メールの活用による査読プロセスの迅速化、投稿論文についてはJ-Stageでの完全オープンアクセス化などを図っていきたく思います。

新しい機能としては、広報委員会を中心にホームページだけでなくFacebookなどのSNSを利用した情報発信を進めています。ホームページは情報量が多くかつよく整理されており、本学会活動の最も主要な広報メディアになっています。一方で、SNSは若い世代に対して影響力が強く、人と人がつながることによって“新しい何か”を生み出せる可能性があります。是非、室内環境学会にアクセスしていただき、いいね！してください。

—会員同士のつながりも重視されていますね。

関根 横のつながりと共に縦のつながりも重要です。本学会では、室内環境研究に多大な功績をあげられた方を名誉会員に推挙させていただいており、2017年は松村年郎先生、嵐谷奎一先生、2018年は柳沢幸雄先生、池田耕一先生を推戴させていただきました。名誉会員として引き続きご指導を賜りたいと存じます。一方、ここ数年の学術大会では、学生会員の活躍が目覚ましいものがあります。学生懇談会も定着し、年々参加者も増えているようです。今後は、学生会員と法人会員の交流がスムーズに行くような企画なども考えていきたいと思っています。

—「グローバル化への対応」についてはどうですか。

関根 目下、MOUに基づく日韓台室内環境学会による国際シンポジウムの定着に努めています。この国際シンポジウムは、2012年に東京・高輪での開催を皮切りに、台湾、韓国と持ち回りで開催するようになり、本学会からもスピーカーを派遣しています。2016年のつくば大会では日本で2回目の国際シンポ

ジウムが開催され、2017年のHealthy Building 2017 Asia (台南)、2018年の韓国室内環境学会 (ソウル) には私自身がスピーカーとして赴き、継続性をアピールしてきました。2019年は沖縄大会にて日本で3回目の国際シンポジウム開催となります。香港や東南アジアなどとの連携も模索していきたいと思っております。—2019年の学術大会は沖縄になりました。

関根 沖縄大会は今回で2回目となります。2015年に琉球大学の堤純一郎先生にご協力を賜り、中井里史大会長のもと当時の理事メンバーが実行委員となって大会を開催しました。予想以上に参加者が多く、たいへん好評でした。これまで学術大会は、関東と関東以外で交互に開催してきましたが、“4年に1度は沖縄”を定着させたいと思い、今回は三宅祐一先生 (静岡県立大学) に大会長をお引き受けいただきました。前回はミス沖縄にも参加していただきましたが、さて今年はどうなるでしょうか。どうぞお楽しみに。

—「プレゼンスの向上」にはどう取り組みますか。

関根 学会のプレゼンスは、派手に露出すれば高まるというものではなく、地道な学術研究活動の継続があってはじめて培われるものと思っております。学術大会の開催、学会誌の年3回発行の堅持はもちろんのこと、6分科会の活動、東北・関西・九州支部の活動を積極的に支援させていただき、会員の皆様が入会して心から良かったと思える学会にしていきたいと思っております。

—産業界との連携も重要ですね。

関根 もちろんです。本学会は、学際的であることと同時に、産・官・学の連携が活発であるという特徴があります。事業委員会が主催する室内環境学会セミナーは、現在年2回 (9月に幕張、1月に大阪) 開催されており、法人会員のみならず多くの企業の方にご参加いただいております。また室内環境学会標準法の制定についても随時受付していますので、気軽にご相談頂きたいと思っております。

—学会運営にあたって特に配慮している点がありますか。

関根 本学会会員の学術的バックグラウンドは、医学、建築学、化学、生物など多岐にわたります。まさに学際的です。これら多岐にわたる学問分野間でシナジー効果を生み出すには、多少の努力が必要です。

例えば、「ヒトに関する研究」に関しては、医学分野と理工学分野では倫理審査に対する考え方に温度差があり、意識を共有するという点で課題があります。利益相反 (Conflict of Interest) に関しても今後議論が出てくるでしょう。また、SI単位系に基づく表記に関しても、カロリー (cal) とジュール (J)、水銀柱 (mmHg) とパスカル (Pa) などのように分野間で相違があり、このような差異あるいは多様性をどう創造性につなげていくか、知恵の絞りどころです。

—最後に「スマート・ソサエティ」についてお聞かせください。

関根 就任1期目は理事長あいさつの副題に「スマート・ソサエティを目指して」と付けさせて頂きました。学会運営をスマートフォンに例え、室内環境学会にすでに搭載されているアプリ (機能) についてはなるべくわかりやすくご紹介して利用しやすいように、そして新しいアプリ (機能) はタイムリーに搭載していきます。2期目は目指すのではなく、「スマート・ソサエティとして」の運営をより一層心がけたいと思っております。これから二年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。



スマート・ソサエティとして